

Title	福井準造の思想的原点：日清戦後の「知識人」とナショナリズム・社会主義・農業
Sub Title	
Author	松田, 隆行(Matsuda, Takayuki)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1997
Jtitle	近代日本研究 Vol.14, (1997.) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19970000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福井準造の思想的原点

——日清戦後の「知識人」とナシヨナリズム・社会主義・農業——

松田隆行

はじめに——福井準造研究の意義——

福井準造を知る人は、あまり多くはないであろう。しかしながら、彼は少なからぬ注目を集めてきた日本近代史上の人物である。その理由の一つは、彼の著作『近世社会主義』が社会主義を解説した文献としては日本で最も初期のものであるからである。すなわち、社会主義を解説した最初の文献として知られる村井知至『社会主義』が刊行されたのは一八九九年（明治三二）七月一二日であったが、福井準造『近世社会主義』が刊行されたのは同年七月一六日であったのである。¹ また、この著作は中国語に翻訳され、中国に初めてマルクス・エンゲルスの社会主義論を紹介したとされている。この著作と中国との関係を日本に紹介したのは、郭沫若であった。² 彼

は南原繁との対談「十八年ぶりの日本」の中で次のように述べている。⁽³⁾

郭「もう一つおもしろいことを申し上げましょうか。一九一三年（ママー引用者注）の出版で、お国の福井準造という人の書いた『近代社会主義』という四巻になっている本が、私どもの方に翻訳されたのです。

私どもの方でマルクス、エンゲルスを知ったのは、この本によって知ったのです。この本にごく簡単ですけど、マルクス、エンゲルスの科学的社会主義のことを述べて、それ以前のはユートピアの社会主義だということを書いているのです。だから文献の上ではこれが一番古いということなんです。ですから私どもがマルクス、エンゲルスを知ようになったのは、やはりお国の紹介によったということなんです（笑）。ところがお国の人は福井準造氏は知らない、「それは貴方が間違っている、福田徳三だろう」というのですが、そうじゃない。福井準造なんですよ（笑）。お国の社会主義者たちは、おそらくそのことには気がつかないだろうと思いますね。」

こうした社会主義との関係に注目して福井準造を取り上げた論稿は、長谷川博「十九世紀末のわが社会主義」をもってその嚆矢とする。⁽⁴⁾そこにおいて長谷川は、先にみた郭沫若と南原繁の対談「十八年ぶりの日本」に言及し、日本人は福井準造を知らないことについて、なぜ福井が知られていないのかという問いを立てる。そして、その理由として、三つの点を指摘する。すなわち、第一に、『近世社会主義』は纂訳的著作であったために当時の「社会主義的知識分子」には重視されずに忘れ去られたこと、第二に、福井は「開明的地主インテリゲンチヤ」の立場であり、自由党≡憲政党に属し、その立場から社会問題の解決策に取り組んだのであって、社会問

題研究会・社会主義研究会には接近していないこと、第三に、著作刊行後の福井の活動も刊行以前と同様に「社会主義者」としての活動ではなかったこと、これらのために、「わが国の社会主義者」に「同志」として遇されずに忘れ去られたとしている。

さらに、向坂逸郎「郭沫若と福井準造の『近世社会主義』」も、同様の視点から福井準造に言及している。⁽⁵⁾ それによれば、来日した郭沫若は、九州大学において次のような発言をしたという。

(前略) そのような一連の話題の中で、郭氏はこんなことを言った。

「お国の人々の中には、中国が『赤い』思想を輸出するのではないかと心配されているようですが、私が社会主義の思想を学んだのは、日本からです。『赤い』思想はむしろお国から中国に輸出されたものです。」と、
いって人々を笑わせて、さらに「私をはじめ社会主義の勉強をしたのは、お国の福井準造さんの『近世社会主義』という著書でした。」とのべた。(後略)

しかし、その場にいた学者たちは、福井準造著『近世社会主義』を知らなかったという。向坂は、福井準造と『近世社会主義』の内容について、「筆者は社会主義者ではないようである」とした上で『近世社会主義』を次のように評価している。

(前略) 中を読んで見て、この書は、むろん著者が自負しているように高度な研究書とはいいがたいが、明治三十二年においては、よくやったものだといふべきであろう。量からいうと、一頁の字数四百七十六字は

どで、五百頁をこえているのである。(中略) いずれにしても、あまり内容の高度でない、そしていまは忘れ去られているこの本は中国社会主義革命家の思想的出発点となったのである。日本でも、この書は、多くの社会主義者をつくることにあずかったかもしれない。私の若い時代には、この書は、もはや何の影響力もなかったと思うが。(後略)

このように、長谷川にしても向坂にしても、福井準造が「社会主義者」ではないという理由で福井とその著作『近世社会主義』を低く評価している。もっとも、「社会主義者」を高く評価する立場からすれば、そうした評価は当然のものといえよう。福井の『近世社会主義』をはじめとする一連の社会主義論、社会問題論は、こうした長谷川や向坂の評価がなされた後には、全くといっていいほど注目されることがなかった。そして、福井準造とその著作『近世社会主義』は現在もあまり知られていない。このことは、こうした評価がなされたことと無関係ではないであろう。長谷川や向坂による福井に対する評価がなされてから三十年になろうという時点で、中村文雄「福井準造の『近世社会主義』と郭沫若と森鷗外」は、『近世社会主義』について、次のように指摘している。⁽⁶⁾

(前略)とにかく古典である。何しろ、あの横山源之助の『日本之下層社会』が出された年であり、幸徳秋水の『廿世紀の怪物帝国主義』の発行される二年前に、こうした本があったことは、私にとって喫驚であった。日本近代社会思想史専攻の人でも、『近世社会主義』のあることを知る人は少なく、読んだ人は現存では数人もいないかも知れない。勿論、明治社会主義年表などには記されていない。(後略)

このように福井準造は、「社会主義」との関連では低く評価されて顧みられることなく時が過ぎたが、その後、彼と地域とりわけ農業との関係に注目して福井準造を取り上げたのは、丹羽邦男であった。⁽⁷⁾ 丹羽は、日清・日露戦後期になると、小作料収入の安定や都市における商工業の発展によって、地主が農業への関心を失っていく風潮が次第に強まる一方で、そうした地主を批判し、地主は、小作人・小農を指導し、農業に投資し、農業改良を推進すべきだとする地主の階級的自覚の主張ともいべきものが出てくるとする。そして、福井準造が『神奈川県農会報』に執筆した「百姓弁」、「農事改良の方策如何」などの論文における主張はその代表的なものであるとしている。

また、内田修道「神奈川県における農会運動の成立と展開―日露戦後地方経営の前提―」は、県農会に結集した旧湘南社のメンバーがなぜ「政治」から「経営」へと転換していったのかについて、その理由の明確な代弁として福井準造「農事改良の方策如何」を取り上げて論じている。⁽⁸⁾

さらに、『平塚市史』に福井準造関係史料が収録され、その他に丸島隆雄による資料紹介もなされている。⁽⁹⁾ 資料紹介の「解説」において丸島は、次のように指摘している。

(前略) 福井準造については、この『近世社会主義』の著者として語られる事はあったが、今後はそれ以外の面からも研究していく必要のある人物と考える。福井の本領は、在野の研究者であった前半生より、地域での農業政策や国政で活躍した後半生にあり、それらの業績ももっと評価されるべきであろう。彼の研究や著作は、ただそれのみを取り出して評価を与えるのではなく、彼の後半生の行動にどのような影響を与えたのか、こうした視点からの再検討も必要である。(後略)

丸島の指摘することく、福井準造の「後半生」については、まだ検討の余地が残されている。また、福井の「前半生」における『近世社会主義』をはじめとする社会主義論・社会問題論にしても、先にみたごとく、低い評価がなされたのみで、その分析はきわめて不十分にしかなされてこなかった。そのため、「前半生」と「後半生」の関連も明らかにされてはいない。

これらの研究史上の問題点は、一部の研究を除いて福井準造の思想と行動が「社会主義者」であるか否かという視角からのみ論じられてきたことによるものである。しかし、そうした視角は、福井準造の思想と行動を明らかにする際には妥当なものであるとはいえない。福井は、『近世社会主義』をはじめとする先駆的な社会主義・社会問題論を世に問うた早熟な「知識人」であっただけでなく、地域に根ざし、農業にかかわり続け、さらに国政にもかかわるといふ、日清・日露戦後期の社会と政治に実践的に働きかけた人物であった。⁽¹⁰⁾日清・日露戦後期は、産業革命が進展し、資本主義が確立していく過程であった。福井の思想と行動に影響をあたえたのは、この時期において現実の問題となりはじめた社会問題と社会主義の問題だけではなかった。同じく産業革命の進展過程においては、寄生地主制が日本資本主義の構造的一環として確立していったが、この時期の農業問題が福井の思想と行動に大きな影響をあたえたのである。彼は、郷里において、農業の振興のために農会活動を積極的に行った。神奈川県農会の副会長となり、県下で初の耕地整理を完成した。その間、農商務省嘱託として、神奈川・静岡県下の工場・職工調査に従事している。その後、国会議員となつてからも、農政研究会所属の議員として活動するとともに、帝国農会創立委員・帝国農会評議員として農政に関与した。すなわち、福井準造の思想と行動の歩みは、日清・日露戦後期における福井の実践の軌跡に他ならない。その意味では、福井準造は、この時期の一

人の人物の思想と行動を通観できる興味深い人物であるといえる。また、彼が、その生涯において何を考え、どのように行動したのかを説明することは、単に一個人史の解明にとどまらず、福井が生きた時代を福井を通して語ることもあり、近代史研究にとって少なからぬ意義をもつものといえるのではなからうか。

福井が問題意識を持って実践的に行動したのは、いうまでもなく彼が「知識人」であったからに他ならない。すなわち、彼の「知識人」としての問題意識のあり方は、その「後半生」の実践的な行動を規定したといえるのである。それゆえ、福井の「前半生」と「後半生」の関連を明らかにするためには、彼の「知識人」としての問題意識を明らかにする必要がある。「知識人」としての福井の代表作ともいえるべき『近世社会主義』をはじめとする先駆的な社会主義・社会問題論それ自体については、先に指摘したごとく、低い評価がなされたのみで、その分析はきわめて不十分にしかなされてこなかった。しかし、福井は「社会主義者」ではないが、最も初期の段階における社会主義思想ないし社会政策思想の受容の一つのあり方の解明という点において、その社会主義・社会問題論の検討はそれ自体として意義があるといえよう。そうした検討をする際にも、そこにおける福井の問題意識の解明なしには内在的な分析は不可能であり、その結論は外在的な観点からする低い評価に帰着するであろう。このようにみえてくると、「知識人」としての福井の「前半生」における問題意識の解明は、福井の思想と行動を総体的に解明するためにも、また、その先駆的な社会主義・社会問題論を解明するためにも避けては通れない課題であるといえよう。こうした福井の問題意識を解明する際には、その前提をなす彼の「知識人」としての思想の形成過程が問題となる。そこで本稿では、同時代の政治・社会状況との関連を考慮しつつ、『近世社会主義』以前に書かれた福井の論文について、福井の用語法と論理に従って内在的に分析することによって、福井の思想的原点ともいえるべき「知識人」としての思想の形成過程を明らかにすることにしたい。

一 「文明」批判とナシヨナリズム

福井準造は一八七一年（明治四）に神奈川県大住郡小嶺村（現平塚市豊田小嶺）に福井直吉・ナミの長男として生まれた。父である福井直吉は、国会開設運動および自由民権運動の地方結社である湘南社の設立にかかり、県会議員さらに国会議員として活動したことで知られる人物である。¹¹少年期の準造は、父である直吉を通して自由民権運動などの当時の政治状況から思想的影響を受けたであろうことは想像に難くない。準造は「知識人」であつたわけだが、彼の「天下国家」への関心は、当時の政治状況の影響を抜きにしては考えられないであろう。

福井準造は慶應義塾に学び、英文学を修めた。一八九一年（明治二四）の卒業後は、自由党系の神奈川県青年会が発行した雑誌である『新潮』に論文を寄稿するようになった。¹²

一八九五年（明治二八）五月に福井は、『新潮』に「文明論」を発表している。この年は、日本が日清戦争を勝利のうちに終結させ、四月に日清講和条約を調印したが、それが露独仏三国による対日三国干渉をひきおこした年である。福井は、「文明論」を次のように始めている。¹³

開国茲に三十年、文化の風潮朝野に弥漫して、挙国開明の域に進み、民臣文運の隆盛に逢ふ、福祉今より大なるは無し、殊に技芸の発達工業の進歩農業の改良世を富まし国を益すること前古殆んど未曾有と称す、文明の兆しか開化の果か何ぞ進歩の斯く至大にして而も至速なる（後略）

このような著しい「進歩」にもかかわらず、現実の「文明」は理念としての「文明」とは異なったものとなっていると福井はいう。

(前略) 古来文明を解さる者多し、然れども解して其当を得ざるもの比々皆然り、技術の発達をして道義の発達と伴はしめば即ち可、外界の進歩をして内界の進歩に伴はしむれば即ち可、之を換言すれば物質的文明の発達は必ず抽象的文明の発達と其速度を平行せしむれば社会一部の観察は採りて以て其全般を識別し得べく、文明なる語は直に福祉の増進と共に其歓迎を受くべきも世事多くは之れに類せずして外界幾層の進歩と内界幾分の退歩を意味し、物質的発達の趨勢は却て精神的廢頽の傾向を示す法網愈々密なれば(後略)

すなわち、本来ならば「文明」は、「外界」と「内界」すなわち「物質」と「精神」の「進歩」が並行するものであるはずなのに、実際には「外界」すなわち「物質」は「進歩」しても「内界」すなわち「精神」は「退歩」する傾向にあるというのである。その最も象徴的な実例として、福井は現実の国際関係をあげている。

(前略) 譎詐の風益々多く兵器日に精なれば争鬪年を追ふて劇げし、強国の間には僅に独立の余喘を保つも一朝国力平均の権衡を失せば邦家百年の運命も外臣虎狼の欲に供するのみ、数へ来らば日も亦足らじ、仮しや国際公法の常規に依りて仁を尊み悪を責め蛮行獸為を抑制し無名の干戈を嚴禁するも一に外交家の操縦に依りて戦乱の禍害は何時か全世界に弥漫するや未だ容易に図り得べからず、腕力を以て無上の権力となし生存競争至る所に行はれ、弱肉強食は天下の通則となり優勝劣敗もまた不動の原理として国際の間に誤用

せられ、国として渾円球上に存するもの兵員幾何武備若干以て対等の交をなすを得べく、必ずしも倫理の如何道義の何たるを問はざるなり、耶教博愛を以て誇る西方諸国の状態殆ど斯の如く而も自ら文明と称し開化と唱ふ、文明を解するもの其惑ふ所蓋しこゝにあり（後略）

現実の国際関係においては「弱肉強食」が「天下の通則」となり、「優勝劣敗」もまた「不動の原理」となり、「倫理」や「道義」を問わない状況になっている。それにもかかわらず、西洋諸国が自ら「文明」と称することに福井は疑問を呈している。

そして、「文明の解釈」について、アーンノルド、ギゾー、ファーガソン、バックルらの所説を検討した上で、現状は、果たして「文明」といえるのかという問題を提起する。

（前略）文明を以て物質的智識的の二素に分ち、相互の進歩せる状況を以て文明なりとす、畢竟するに文明なるものは、道義の発達に伴って物質の改良を成就せし結果に外ならず、然らば即ち今日の状態果して此等諸学者が説く文明なるものに恰当するや否や（後略）

それに対する福井の答えは、否である。

（前略）見よや世の文明を説く者徒らに無稽の理想を凝らして其解説を得んと勉むるも、而も近時の文明は彼等に向つて一も適例を示すことなく却て其反動を逞ふし、腕力これ権力てふ昔時の確言は終世不磨の実例

を頭はしつゝ強者常に誇り弱者常に泣くもの比々皆然らざるはなし（後略）

これに続けて、アヘン戦争とそれについての欧州の歴史家による「強き人民が暴力を以て一政府に逼り其人民の毒害せられんことを許せよと脅嚇せしものなり」という評価を例にあげ、「近時の文明が果たして如何なるものなるかを知るに足らん」としてゐるのである。

さらに福井は「白人多数の人類」と「文明開化」について、次のように述べてゐる。

（前略）今や白人多数の人類は一致団結の下に多数專政の素を形成し陰に陽に他色の人民に向て其政策を實施しつゝ殆んど人類以外の待遇を以て之を遇することなきにあらず、若し夫れ今日の形勢に安居して文明を喜び開化を歌ひ世運の隆頽を察せずば或は恐る文明開化なるものは余輩を駆りて無秩序無整頓の境遇に陥らしむるを（後略）

福井は、現状では「徳義」は「文明」と並行して發達するとはいえず、「文明」によつて「利益」を得ていることは事実であるが、それでも「文明の眞価」を問題にせざるを得ないとする。

（前略）嘗て文明を以て人類社会を楽園に変せしむるものなりとの空想を抱きし諸学者も天下の風潮日に漸く非なるを觀破して「徳義ハ文明と平行して其發達を遂行し得べきや否や」てふ一種の奇論を公言するに至れり、文明果して徳義の破壊を意味するや、徳義遂に文明と伴ふ能はざるか、想ふに之を天下の現状に察せ

バ、斯論は決して架空の痴言にあらじ、余輩素より今日の文明に依りて幾多の利益を得、幾多の智識を求むるに不便なからん、然り不便なきの今日に於て尚ほ文明の真価如何を喋々するもの豈に余輩而已に限らんや
(後略)

以上のように述べて、福井は「文明論」を次のように結んでいる。

(前略) 日清の戦争は万代未聞の国栄と千歳不磨の名声を留めて大日本帝国万歳声裡に凱旋の功を奏しつゝ、膺懲の師將に故山に帰り東洋の天地再び平和の裡に太平を謳歌せんとするの今日に際して、殺氣堂に満ち腥風強く妖雲慘憺として天の一角に密集し天下の人心再び狂せんとするもの果して如何なる現象か、文明の礼開化の儀希くは規定の法則をして功を万全に奏せしめよ、嘗て聞く南洋の土民本国政府の政策を非難して南洋は南洋自から之れを治めんと絶叫せりと、豈に夫れ南洋のみならんや、東洋自ら人種のあるあり、願くは之れが処置を任ずるに唯一東洋の人種を以てせよ、何ぞ外人の容吻を免さん、彼等自ら文明を誇稱して法規の如何を喋々するも仰で殷鑑を顧みて前車の覆轍を思はゞ未だ容易に信託すべからざるなり、田野の蒼夫時事に感じて文明論を作る

ここで福井が述べていることについていえば、表現こそ直接的ではないものの、日清戦後の露独仏による三国干渉に対する批判がその根底にあることは明らかである。「殺氣堂に満ち腥風強く妖雲慘憺として天の一角に密集し天下の人心再び狂せんとするもの果して如何なる現象か」という表現は、三国干渉後の東アジア地域の情勢

に対する福井のとらえ方を示し、それを理念としての「文明」から批判したものと見えよう。また、「東洋自ら人種のあるあり、願くは之れが処置を任ずるに唯一東洋の人種を以てせよ、何ぞ外人の容喙を免さん、彼等自ら文明を誇稱して法規の如何を喋々するも仰で殷鑑を顧みて前車の覆轍を思はゞ未だ容易に信託すべからざるなり」という福井の言葉は、東アジア地域へのヨーロッパ列強の軍事的示威行為である三国干渉そのものとそれを実施した露独仏に代表されるヨーロッパ列強への批判という文脈でとらえるべきであろう。このように、三国干渉を契機として、福井は、理念とは異なった現実の「文明」批判という形式をとって、ヨーロッパ列強に対する批判を行ったのである。それはまた、日清戦後のナショナリズムの一つあり方を示すものといえる。⁽¹⁴⁾そして、それはロシアに対する脅威論へとつながってゆくのである。福井が同年六月に『新潮』に発表した「露西亞の大勢を論ず」は、次のように始まる。⁽¹⁵⁾

清の和漸く成りて、天下再び其堵に安じ、臣民復た太平の夢に眠る、然れども余輩大日本帝国臣民の一分として、戦勝の結果、東洋平和の爲めに其将来を、我政府に向て忠告したる、露独仏の三国に対しては、毫も其大恩を忘るべからざるなり、殊に露国は、我が北隣の一大雄邦として、帝国は最大恩恵を斯国に負ふ、寤寐の間、尚ほ此大恩を反省して、決して怠るべきにあらず、今斯国の大勢を略述して以て識者の教示を請はんとするも、抑も亦徒為の業にあらざる乎（後略）

三国干渉に関して、「戦勝の結果、東洋平和の爲めに其将来を、我政府に向きて忠告したる、露独仏の三国に対しては、毫も其大恩を忘るべからざるなり」として、皮肉ともとれる「大恩」という表現をしている。そして

三国の中でも、特にロシアは、「我が北隣の一大雄邦として、帝国は最大恩恵を斯国に負ふ、寤寐の間、尚ほ此大恩を反省して、決して怠るべきにあらず」とした上で、次のように述べている。

(前略) 文学博士外山正一先生、曾て今日あるを洞察せしや否や人未だ辺境の憂を思はざりし明治二十二年の頃、彼れハ「社会結合三大一統露西亜の大恩」てふ一書を著はし、暗に日独伊三国の同盟を勧誘し、以て露西亜が吞噬の国策に対して、堅固の堡壘を築かんことを論じ、且つ露西亜の吞噬策は、適ま天下の諸国をして、和親同盟の稽古を為さしむるの媒介として、大いに露西亜の大恩を感謝したりき、我国人をして、眼光の鋭利なる皆博士の如くならしめば、国家が重ねて露国の恩恵に預るの愚をなさざりしに、今にして之を思へば、転た噬臍の悔なきにあらず。(後略)

このように「露国の恩恵に預るの愚」を犯してしまつたことは残念であるとしつつも、福井は、その原因を明らかにすることによって、未来の情勢を推測することはできるとする。

(前略) 蓋し世運の隆頽は、陰約の裡に其変遷を行ふと雖ども而も其原動力の所在を察知せば、未来を洞察すること難からじ、独の強を欧州の中原に唱へ、英の覇を世界の海上に称す、其一因にして足らずと雖ども、歴史は其本源を摘示して、明亮に之れを余輩に示すに非ずや、露人の我国に恩人たる所以(独り我国のみならず、亜細亞諸州の大恩人たる所以)、豈に亦知り難からんや。(後略)

そして、そのためにこそ、ロシアの歴史を繙くのであるとしている。

(前略) 誰か云ふ歴史は過去の記録なりと、過去の記録は現在の動作を指示し、現在の動作は未来の方針を察知するに便なしとせんや、余輩が今日に於て、殊に露西亜の歴史を繙く所以のもの、亦此理と外ならず
(後略)

この論文では、それに続いてロシアの歴史が検討されていくのであるが、その際の視点は、ロシアの版図拡張に注目するものであったのは当然であった。

(前略) 露国の其版図拡張に熱心なるは、過去現在の事蹟、之れを証して余あるにあらずや、若し夫れ斯国の歴史を通覧して、其一挙一動に留意せば、必ずや思ひ半ばに過るものあらん。(後略)

そして、福井はロシアの現状について、次のように分析している。

(前略) 内治を尋ねて外政を見、露国の挙動に注目すれば、其欲望の今にして熄むべきにあらざるを察知すべし(後略)

さらに、こうした版図拡張の意欲を持ち続けているロシアの現状について、どう対応すべきかについて論じて

いる。

(前略) 余輩大日本帝国臣民たるもの、既往を鑒みて将来を察し、徐ろに前途の企計を画せざるべからず、今や新たに斯国の大恩に感謝して、益々其深意の存する所を察せば、余輩亦黙して已むべきに非らず(後略)

このように福井はロシアに対する脅威を唱え、対応策を講じることを主張したのである。

それゆえ、同年九月に『新潮』に発表した「露西亞の外交政略及び其歴史」において、三国干渉を行った「三国」の名は忘れられつつあり、さらにロシアの動向への関心も薄れていつている現状について、福井は次のように批判している。⁽¹⁶⁾

(前略) 何んぞ知らん、今や三国の名称ハ、七十五日の噂と同じく、正に国民の脳裏を去らんとし、露西亞帝国の挙動の如きも、亦大に世人の注目を惹くに足らず、其支那の爲めに国債担保の任に当りしも、將たシベリア鐵道の成功を急促せるも、殆ど雲烟一抹に附せられんとす、一時に驚動狂呼する日本国民の真情とは云ひながら、何んぞ事物を看過するの易々又軽々たる。(後略)

そして、ロシアの情勢については、常に注意を払うべきであると主張するのである。

(前略) 今や余輩は茲に秃筆を弄して、敢て露西亜の外交策を序述せんとす、当世人士の耳目に容れられざる素より之を知る、読者の知遇に値せざるも亦之を知る、然れども天下今日の形勢ハ世界最強國の一として北方隣國の一として將た我国が曾て恩恵を蒙りし一帝國として一日も其國勢の如何を知らざるべからず。
(後略)

以上でみてきたように、福井の思想の出発点は、三国干渉を契機としたいわゆる日清戦後のナシヨナリズムであつたのである。

二 「社会主義」への関心

福井準造が「社会主義」について言及したのは、一八九五年(明治二八)七月に『新潮』に発表した「十九世紀の社会主義及び其評論」が最初である。¹⁷そこにおいて福井は、社会主義の生成と発達の理由を先ず問題とする。福井によれば、「社会主義」とは「財産の平等」を意味し、その実行の手段によっては「過激なるもの」もあるが、「温和なる諸説」¹⁸ついていへば、それは排斥すべき暴論ではないという。そして、「財産の平等」が「国家」にとって持つ意味について次のように述べている。

(前略) 且つ権利の平等と共に、財産の平等も亦た国家の為に質すべくして、其国强盛の度も其財産の総計が、単に他國に勝るを以て知るべからず、富が一所に集注せるは、却て國家が財産偏重の病苦を蒙り、歳

出入の支障を生じ、為めに国力の減殺するを免れず（後略）

ここでいう「財産偏重の病苦」の例として、イギリス政府とロスチャイルド家の関係などをあげて、次のように続けている。

（前略）財産の一处に集合する、決して国家の慶事にあらじ、寧ろ加かんや、富の散布せる甚だ広く且つ多くして、幾多の所謂自治自産家を有するには、国家強弱の度亦た依りて繋るなきにあらざ、貧富の隔絶は、決して希望すべきにあらざるなり、之を掃除し、之を平医し、万民福利をともにせんとす、遂げ得べくんば余輩は寧ろ社会主義の人たらん哉（後略）

このように福井は、「貧富の隔絶」を「国家」・「国力」という観点から問題視している。そして、この「貧富の隔絶」を解決せんとするものとして「社会主義」をとらえて評価しているのである。しかし、現実には「社会主義」は嫌悪されていた。福井は、なぜ「社会主義」は嫌悪されるのかという問いを立て次のようにいう。

（前略）権利の偏重偏軽に苦しみし社会は、今や所謂立憲政治の下に、其平等を謳歌すると同時に、其下層に於ては、財産の偏重偏軽に苦しみつゝ切りに其平等を叫ぶものあり、社会主義亦其一なり、故に財産の偏重を喜ぶ上流社会の士の、之を目して暴論となす、尚ほ昔時王侯貴族の自由民権の諸説を以て、暴論激説なりとなせしに同じ、彼れや権利の偏重を樂しみ、これや財産の偏重に喜ぶ、有形の財産と無形の権利との間

に於ては、多少の差異なきにあらざると雖も、其偏重を喜ぶ所以は一なり、而して昔時暴言をして貴人の圧抑を蒙りし自由民権説が、今の世界に正理公道たるが如く、他日財産の偏重を平医せしの時に及んで、現時の所謂社会主義も、亦決して暴論たらざりしを知るに至らん乎（後略）

このように福井は、「社会主義」が暴論とされる理由を説明し、「社会主義」は暴論ではないとした。ただし、「社会主義」を全面的に肯定はしなかった。

（前略）誤解する勿れ社会主義を論するの士よ、余輩は、其極至の大目的には或は其真理の幾分を含むやを想見するも孰んぞ社会主義の凡てが正義公論なりと云はん耶（後略）

福井は、これに続けてサン・シモン、ラッサール、マルクス、ブルードン、フリーエ、オーエンなどの「社会主義」およびフランス、ドイツの「社会党」に言及している。そして、なぜ社会主義が発達したのかについて次のように述べている。

（前略）然れども思へ、其形体に於て其智識に於て、將た其能力に於て、自由平等の幸福を享有し得べき世間幾多の生霊が此世に生まるゝや否や、既に悲連なる涙の泉谷に彷徨ふて快事の何物たるを知らず、享くべき当然の運命を保持しながら、尚ほ且つ境遇の如何に依りては、牛馬と列して終日の劳苦に一碗の食なきを歎じ、身心を粉にして今日の生活を謀れども無情の雇主は終夜の快夢を与へずして其心血を喫す、去りて金

殿玉楼の上に見よ、食前方丈佳肴前に在り、美姫後に侍し、天下の楽事を尽して尚ほ足れりとせず、益々これ等不幸の貧兒を酷待して、其膏血に酔はんとす、然れども經濟学者の所謂分業てふ一種の口実は、これ等金銭上の圧制を寛容して、資本主と労働者との名辞の下に、益々其剛欲を高めしむ、採りて兩者を対照せば、其懸隔豈に天地のみならんや、(中略)、余輩は今日に於て社会主義の發達するを怪まざるなり(後略)

「貧富懸隔」が存在する以上、それは「社会主義」の發達を必然化するものであった。このことは日本とて例外ではなかった。福井は、次のように指摘している。

(前略) グランド將軍會で日本に遊び、其貧富懸隔の度甚だ少なきを見て歎美して曰く、之れ国家の美風なりと、爾來幾年この歎美せる日本の国家は、年と共に文明の域に急進すると同時に、下層に於ける幾多窮民の喚声は漸く高からんとす、文明遂に貧富の懸隔を医癒し能はざれば即ち已む、若し夫れ籌を廻らし計を講ぜば、庶幾くは其度を未然に輕減し得べき乎、余輩は此美風なる我国家の為に、社会党の誕生に就て甚だ憂ふる者なり、然れども之を今日に放任せば、或は恐る他日の禍を成さんことを(後略)

さらに福井は「中等資産家」としての府県會議員選舉者数の減少、土地抵当流れや公売処分施行者などの総計を指摘して、「余輩が社会党の産出するを杞憂する決して無理ならぬを知るに足らん」としている。特に問題なのが、「中等資産の土地所有者」が土地を売却して純小作人化し、その一方で大地主が土地を集積することだとする。それだけでなく、賃金は低額にもかかわらず、物価が高騰することによる「下級労働者」への影響も問題で

あるとする。福井は、次のように指摘している。

(前略) 若し夫れ政治の思想多少是等窮民の脳裏に染入し、権利平等を唱ふるに至れば、必ずや下層貧窮の現態に満足するものにあらざるなり(後略)

福井は、以上の分析を踏まえて、次のように結論する。

(前略) これ等諸般の事情を推考し来りて、邦家百年の前途を思へば、今日は決して安居の時に非ず、外交宜し、巧なるべし、軍備宜しく拡張すべし、国権の発揚さらに必要なり、然れども国家が財産偏重の脳充血病に罹るの不幸あれば即ち如何、殷鑑近く欧州諸国にあり、徒らに前途の如何を顧慮せずして、社会党の發生を来し其勢力益々強盛になり、以て統御し難きの時に及んで、今日を顧るも既に晚し(後略)

以上でみてきたように、福井は、「国家」・「国力」という観点から「貧富の懸隔」の拡大を問題視し、「社会主義」の発達、「社会党」の發生を先制的に予防するために対応すべきであると主張した。こうした発想は、当時の「社会主義」・「社会問題」への対応をめぐる思想に共通した特徴である。⁽¹⁸⁾このように「国家」・「国力」という観点から論を展開するのは、いわゆる「志士仁人」的な「知識人」である福井の発想のあり方を示すものといえる。ここで注目すべき点は、福井が「外交宜し、巧なるべし、軍備宜しく拡張すべし、国権の発揚さらに必要なり」と述べ、それに続けて「社会主義」の発達、「社会党」の發生への予防先制的対応を主張している点である。

すなわち、福井にあっては、軍備および国権の拡張を主張する「国権思想」と「国家・「国力」という観点から発想する「志士仁人」の思想とが結びついて存在しているのである。いうまでもなく、この二つを結びつけるものは、「国家」・「国力」という観点である。先にみた「文明論」、「露西亞の大勢を論ず」、「露西亞の外交政略及び其歴史」における主張を想起すれば、福井のこの「国権思想」は、日清戦争後における彼のナショナリズムの延長線上にあることは明らかであろう。福井にあっては、この「国権思想」が「志士仁人」の思想と結びつくことによって、「国家」という観点がより前面に押し出されるようになったと考えられる。そのため、「貧富の懸隔」の存在を「窮民」という観点からではなく、「国家」・「国力」という観点から問題視したのである。このように「国権思想」と「志士仁人」の思想との結合が、福井の「社会主義」への関心のあり方を規定したのである。こうして「国家」の存立を脅かす「貧富の懸隔」の存在を問題視した福井は、「社会主義」の発達、「社会党」の発生への予防先制的対応を主張したのである。

三 「農家の人」の自覚

福井準造と農業とのかわりは、彼が農会に参加して「農家の人」としての自覚に目覚めたことに始まる。福井が『新潮』に多数の論文を発表した一八九五年（明治二八）は、神奈川県農会が成立した年であった。¹⁹その翌年の三月一日、福井は大住洵綾郡農会第一回の発会式に出席する。そこで彼が受けた衝撃を契機として書かれた論文が、同年三月に『新潮』に発表した「日本農民の現状と田土平均論」である。²⁰その冒頭には、執筆動機が次のように述べられている。

三月一日、大住洵綾郡農会第一回の発会式を大住郡金目村小学校に挙行せられ、余も亦其末席に列して県知事始め農学士諸君の演説を傍聴し、莫大の智識を学修せると同時に、自から農家の人たるにも係らず全く農業上の智識に欠乏せるを憶ひ、顧みて赤顔の至りに耐へず、即ち研究の方向を変じて農家の状態を探り、聊か自家の愚見を附記して、以て農会一部の責に充てんとす（後略）

ここに「自ら農家の人たるにも係らず全く農業上の智識に欠乏せるを憶ひ、顧みて赤顔の至りに耐へず」と述べられているように福井は大きな衝撃を受けた。すなわち、これまでの自分の知識が全く役に立たないことが明らかになったのである。このことは福井にとっては、国家・社会のために尽す「志士仁人」である自己の存在意義を問わざるを得なくなることであった。それゆえに、「即ち研究の方向を変じて農家の状態を探り、聊か自家の愚見を附記して、以て農会一部の責に充てんとす」と福井は考えたのである。この衝撃は福井が「知識人」であるがゆえに受けた衝撃であるといえよう。

こうして「農家の人」としての自覚に目覚めた福井は、日本農民の現状における問題点について次のように指摘する。

（前略）余輩は、日本農民の現状に就て、杞憂に耐へざるものあり、何ぞや曰く、大地主の膨張と小作人の増加と即ち是なり（後略）

では、大地主の膨張と小作人の増加がなぜ問題となるのか。

(前略) 独り我国の志士は、何が故に年々我国に於て、其傾向を甚うする大地主の膨張、小作人増加の事実を黙々に附せんとする哉、殊に国家の元氣を作為し、国民の精神を發揮する国家第一の心腦を、何処に存するかと云へば、実に自作農夫其人たることは、万人共に首肯する所にして(後略)

大地主の膨張と小作人の増加は、「国家第一の心腦」である。「自作農」の減少を意味した。すなわち、福井は「自作農」の減少についても「国家」という観点から問題視したのである。福井は、「国家」と農業の関係について次のように述べている。

(前略) 我日本立国の大本は、果して何処に繋りて有するや、将来はいざ知らず、現今にありては、農は即ち国の本なること、尚ほ旧時と異ならず(後略)

福井によれば、日本の「立国の大本」すなわち「国家」の存立の基礎は、現時点では農業にはかならなかつた。このように「国家」という観点から発想する福井の「志士仁人」の思想は、「農は即ち国の本」という点において「農本主義」思想とも結びついたのである。⁽²¹⁾つまり、大地主の膨張と小作人の増加すなわち自作農の減少という「農業」の危機は、福井にとっては「国家」の危機を意味したのである。

これまでは「田土の平均」は保たれ「此国の大本」は動揺せずに来た。しかし、今や大地主の膨張と小作人の

増加の結果として「田土合併」が増長される傾向にある。それは五円以上の納税者である府県会議員選挙人の総数が大きく減少していることに表れている。すなわち、これは中級農民の数が減少したことを示し、これらの多くは所有地を失って、五円以下の納税者または純小作人となっているのである。

(前略)之を要するに日本農民の現状は、土地自由売買の許可を得しが為め、之を利導するの機を得ずして、之が為めに全然(名義上迄も)其實際を失ひ、幾多の農夫が年々歳々純小作人に変じつゝあるは、これ実に日本農民刻下の現状なりと云はざるべからず(後略)

このように福井は、日本農民の現状としての大地主の膨張と小作人の増加を問題視したのである。ここで福井は、「十九世紀の社会主義及其評論」と同様に府県会議員選挙者数の減少を指摘して論を展開している。すなわち、福井は府県会議員選挙者数の減少という「貧富の懸隔」を日本農民の現状の問題として再把握したのであり、ここに福井の社会主義への関心と農業の現状分析の視角との関連をみてとることができるのである。

福井は、大地主の膨張と小作人の増加の結果として生じる「田土合併」についての対策を次のように提言している。

(前略)請ふ余輩をして田土合併に対する自然の趨勢を打破する一大勢力を発見せしめよ、余輩は素より農家各自に田土の改良を行ひ、農業経済の完成を期し、農事副産物の発達を謀り、以て自家生計の慰安を得せしめん事を企図すると同時に、政府寧ろ国家に対して大に希望する所なくんばあらず、何ぞや曰く完全なる

小作条例を發布し、土地に関する諸制度を全備し、其他諸般の事業に政府の干渉を行はしむるにあり(後略)

このように「田土合併」の進行を止めるために、小作条例の制定をはじめとして「政府」すなわち行政が介入することを福井は要求したのであった。

以上でみてきた福井における「農家の人」の自覚とそれを契機とする農業への彼の関心は、その後の福井の農業へのかかわりを決定づけたのである。

むすびにかえて——『近世社会主義』における問題意識——

最後に『近世社会主義』における福井準造の問題意識を検討して本稿のむすびとしたい。

福井準造の思想の出発点は、三国干渉を契機としたいわゆる日清戦後のナショナリズムであった。その延長線上に存在した彼の「国権思想」が「志士仁人」の思想と結びつくことによつて、福井にあっては「国家」・「国力」という観点がより前面に押し出された。それゆえ、福井は「十九世紀の社会主義及び其評論」において、「国家」・「国力」という観点から「国家」の存立を脅かす「貧富の懸隔」の拡大を問題視し、「社会主義」の発達、「社会党」の発生を先制的に予防するために対応すべきであると主張したのである。『近世社会主義』における福井準造の問題意識もこの主張の延長線上にあった。

「社会主義」・「社会問題」が主題として取り上げられて論じられるのは、日清戦後、明治三〇年代初頭からのことであった。先に指摘したごとく、福井準造が『近世社会主義』を有斐閣から刊行したのは、一八九九年

(明治三二)のことであつた。福井の著作が刊行されたこの年には、村井知至『社会主義』の他にも、横山源之助『日本之下層社会』が刊行されていることが注目される。この年の二年後には安部磯雄『社会問題解釈法』が、三年後には矢野文雄『新社会』が、それぞれ刊行されている。⁽²²⁾

福井は、「近世社会主義自序」を次のように記している。

社会主義の何たるかを知らずして社会党の行動を稽ふれば或は之を以て孟狼過激の兇徒となし、安寧秩序の仇敵と思惟するものなきにあらず。然れども、文明の到る処、社会問題は必ず之に随伴し、社会党亦従て興る。余や素より事実に暗く時勢に迂なり、独り切りに慷慨して以て当世憂国家の態を粧ふものにあらず、況んや能文達識の士に倣ひ、博覧多才を銜ふに於てをや。然れども滔々たる社会の潮流を静観して事物変態の蹟を尋ね、徐ろに其趨向を視察すれば、日本今日の形勢は、社会問題を陰約の中に胚胎し、貧富懸隔の弊、亦將に漸く大ならんとするの徴候を指示するものゝ如し、是れ決して経世憂国の士が平然看過すべきの事実にあらず、余が欧米諸国の事例を稽察して近世の社会主義を講究する所以のもの、其微意の存する所茲に在り矣。江湖の識者之を読むの後、社会問題の果して軽忽に附すべからざるを悟らば、幸に是正の勞を惜む勿れ。

福井は、日本の現状は「社会問題を陰約の中に胚胎し、貧富懸隔の弊、亦將に漸く大ならんとするの徴候を指示するものゝ如し」として、これは「決して経世憂国の士が平然看過すべきの事実にあらず」と述べている。そして、ここに「社会主義を講究」する理由があるとするのである。この点は「凡例」に明確に記されている。

(前略) 一 社会主義は経済学上の一学説たると同時に政治学上の一義論なり、此主義の是非善悪を判定するは本書の目的にあらず。然れども社会問題を解釈せんが為めには、社会主義の講究を必要なりと信するが故に、著者は幾多の社会主義的議論を蒐集し以て社会問題解釈者の資に供するに勉めたり。(後略)

すなわち、福井は「社会問題」へ予防先制的対応をすべきことを主張し、「社会問題」を「解釈」するためには「社会主義」から学ばなければならぬとしたのである。この点にこそ福井準造が『近世社会主義』を執筆した理由があつたのである。

注

(1) 村井知至『社会主義』(労働新聞社社会主義図書部、一八九九年)、福井準造『近世社会主義』(有斐閣、一八九九年)。

(2) 郭沫若と日本との関係については、劉徳有著・村山孚訳『郭沫若・日本の旅』(サイマル出版会、一九九二年)を参照。

(3) 南原繁・郭沫若「十八年ぶりの日本(対談)」、『中央公論』、一九五六年二月、前掲『郭沫若・日本の旅』に再録。

(4) 長谷川博「十九世紀末のわが社会主義―郭沫若先生の一指摘への関説―」、『社会労働研究』第六号、一九五六年。

(5) 向坂逸郎「郭沫若と福井準造の『近世社会主義』」、『図書』一九五七年三月、前掲『郭沫若・日本の旅』一七六頁も参照。

(6) 中村文雄「福井準造の『近世社会主義』と郭沫若と森鷗外」、『国史談話会雑誌』第二六号、一九八五年。

(7) 丹羽邦男「地主制下の農家経済」、『神奈川県史』通史編6 近代・現代(3) 産業・経済1 第3編明治後期の神奈川県経済 第2節、一九八一年)。

- (8) 内田修道「神奈川県における農会運動の成立と展開―日露戦後地方経営の前提―」(『神奈川県地域史研究』第一四号、一九九五年)。
- (9) 『平塚市史』6 資料編 近代(2)、一九九五年、丸島隆雄「(資料紹介) 福井準造「非増租継続論―明治後期の税制論―」(『平塚市博物館研究報告 自然と文化』第一八号、一九九五年)。
- (10) 福井準造の履歴については、前掲長谷川論文および前掲丸島資料紹介の「解説」を参照。
- (11) 福井直吉と彼がかかわった国会開設運動・自由民権運動については、内藤佳康「三代の政治家―小嶺村の福井家―」(『神奈川風土記』第八六号、一九八四年)、同、福井直吉「自由党から実業界へ」(大畑哲編『続よみがえる群像 神奈川の民権家列伝』神奈川新聞社、一九八九年所収)、金原左門「福沢諭吉と相州自由民権家―「国会開設建言書」をめぐって―」(『福沢諭吉年鑑』二二、一九九五年)を参照。
- (12) 『新潮』については、内田修道「神奈川県地方誌『新潮』と『進歩』の主張―政界縦断構想 大日本膨張論への展開―」(『神奈川県史』各論編1 政治・行政、一九八三年)を参照。
- (13) 福井準造「文明論」(『新潮』第十一号、一九九五年五月)。
- (14) 日清戦後のナショナリズムについては、宮地正人「日本的国民国家の確立と日清戦争―帝国主義的世界体制成立との関連において―」(比較史・比較歴史教育研究会編『黒船と日清戦争』未来社、一九九六年所収)を参照。
- (15) 福井準造「露西亜の大勢を論ず」(『新潮』第十二号、一九九五年六月)。
- (16) 福井準造「露西亜の外交政略及び其歴史」(『新潮』第十五号、一九九五年九月)。
- (17) 福井準造「十九世紀の社会主義及び其評論」(『新潮』第十三号、一九九五年七月)。
- (18) この点については、松沢弘陽『日本社会主義の思想』(筑摩書房、一九七三年)二八頁、岡利郎「近代日本における社会政策思想の形成(一)―「国家政治」から「社会政治」へ―」(『思想』五五八号、一九七〇年十二月)を参照。
- (19) 神奈川県農会の成立については、前掲内田論文を参照。
- (20) 福井準造「日本農民の現状と田土平均論」(『新潮』第二十号、一九九六年三月)。
- (21) 農本主義については、網沢満昭「日本の農本主義」(紀伊国屋書店、一九七一年)を参照。
- (22) 当時の社会主義については、絲屋寿雄「日本社会主義運動思想史」(法政大学出版局、一九七九年)、太田雅夫

『初期社会主義史の研究』（新泉社、一九九一年）などを参照。

（まつだ たかゆき

福澤研究センター研究嘱託